

ドナウ通信

No. 59

目次

全日制日本人学校の設立準備状況	設立準備委員会	2
随想 ささやかな読書案内	野沢 佳織	6
ハンガリーでの美容室体験記	菅沼 千鶴子	8
詩歌 2004年元旦:つれづれの俳句 - ドナウ春夏秋冬	齊川 直未	12
補習校より		
創作 「夢十夜」		15
作文 人口問題とマザーテレサ	本 亜由美	19
日本語と英語	二村かおり	20
卒業作文	高橋 真奈 / 塘 健介 / 戸田 大貴 / 林 綾乃 林 健介 / 細川 萌里 / 翠 直孝 / 山崎 勇祐	22
評論 第130回芥川賞を読む	盛田 常夫	29
日本-ハンガリー サッカー親善試合の見所		33
会社紹介 「サンアロー株式会社」		35
創刊15周年記念号原稿募集要項 / マラソンリレー参加者募集		36



全日制日本入学校の 設立準備状況

二 四年四月五日

設立準備委員会

昨年一二月七日の日本人会総会でご報告申し上げましたように、昨年一年度の商工部会定例会及びその直後に開催された日本人会臨時理事会にて、全日制日本入学校の設立が正式に承認されました。

これを受けて、全日制日本入学校設立準備委員会では日本入学校設立に向けての具体的な準備（十二区が管理するヴィラニヨシユ小学校別館の賃貸借契約、学則及び理事会規約の作成並びに運営理事会の立ち上げ等）を開始しました。また、昨年一月三日には、全日制日本入学校の設立が承認されるに至った経緯や日本入学校の運営形態、補習校併設についての考え方について父兄を対

象とした説明会を開催し、日本入学校及び補習校併設に関するアンケート調査を実施しました。

今回は、二 四年度第1四半期の設立準備委員会の主な活動内容と、補習校併設についての考え方について報告させて戴きます。

・設立準備状況について

(1) 十二区とのヴィラニヨシユ小学校別館の賃貸借契約について

当初、二月の区議会にて十二区の承認を得るよう話し合いを進めて参りましたが、交渉の遅れにより、三月末時点では、まだ区議会の承認を得るところまで進んでおりません。日本入学校側の契約案は出来上がっておりますので、今後速やかに交渉を行い、一二区の了解を得たいと考えております。

(2) 学則・理事会規約の作成と、
運営理事会の発足

全日制日本入学校の学則並びに運営理事会規約について、設立準備委員会にて検討を進め、設立準備委員会としての原案を作成しました。これに基づき、三月の商工部会定例会及びその直後に開催された日本人会臨時理事会にて、日本入学校運営理事会の立ち上げが承認されました。今後は運営理事会が、現在の補習校における「運営委員会」と同様に、日本入学校に対する運営責任並びに経営責任を持つこととなります。従って、設立準備委員会は今後、運営理事会の決定・承認に基づき、日本入学校の設立準備を進めて行くこととなります。



・補習校併設について

一月三日の説明会後に実施したアンケート調査の結果は以下の通りです（回答四八件、対象児童生徒数八二人）。

Q1・全日制日本人学校を希望しますか？

YES：四三人、NO：二七人、その他：一二人（高等部進学、帰国予定等）

Q2・全日制日本人学校を希望しない場合、補習校の併設を希望しますか？

YES：二一人、NO：六人

上記の通り、補習校併設の希望が数多く寄せられました。設立準備委員会では当年一月二四日に補習校を希望される父兄を対象に再度の説明会とアンケート調査を行い、今後の対応を検討して参りました。



その結果、まずは希望者が中心になって、学習塾のような形でボランティアベースでの運営を開始し、実績を積み重ねた上で、いわゆる「補習校」として、外務省及び文部科学省に認知してもらおうように働きかけを行っていくのが、最も現実的ではないかという結論に達しました。以下に、これまでの経緯と今後の対応についての検討結果をまとめましたので、ご参照下さい。

一 補習校継続の可否について

補習校（準全日制日本人学校）廃止の経緯

二 三年一月に、文部科学省が、小泉内閣の「聖域なき構造改革」を理由に、二 五年三月末（二年間）での教員派遣の打ち切りを通告してきた時点で、存続は事実上不可能になりました（『準全日制』という形態を取ってきた目的は、日本からの教員派遣にありました）。従って、現在の補習校（準全日制日本人学校）の廃止自体は、日本人学校の設立とは関係ありません。文部科学省からは、今後、全日制日本人学校を目指すのか、あるいは「いわゆる補習校」（科目・時間数を縮小）にするのか、という選択を求められました。こうした状況の中、昨年七月に全日制日本人学校設立準備委員会が発足し、一 一 年度の商工会

会定例会及びその直後に開かれた日本人会臨時理事会にて、全日制日本人学校の設立が承認されました。

補習校新設（全日制日本人学校に併設）の可否

上記の通り、全日制日本人学校の設立は決まりましたが、インターナショナル・スクールを希望する児童生徒、永住予定者の子弟や二重国籍者等のために、従来の補習校（準全日制）に変わる補習校の新設（全日制日本人学校に併設）の可否を検討してきました。その結果、現時点では日本政府の援助を受けられる形での補習校新設は不可能との結論に達しました。

理由は、アンケート調査（昨年一月末実施）の結果、補習校に対する要望が多岐に渡り、設立準備委員会がこれを一つに纏めるのは困難と判断されること、また仮に補習校希望者の要

望を一つに纏めることが出来たとしても、全日制日本人学校と補習校の新設を同時に申請することは、時間的にも不可能だからです（新しく立ち上げた補習校を在外教育施設として認可してもらうには、申請の段階で補習校としての授業が行われていなければなりません。授業の実績があり、運営委員会の組織、財政的な問題すべてが解決できている状態で初めて申請ができる訳で、この点で日本人学校の新設とは異なります。当地は準全日制日本人学校が廃校となった後に、新しく補習校を立ち上げる訳ですから、廃校と同時に新しい補習校の認可を申請するのは不可能です）。

また、当地のように数十人の規模で日本人学校と補習校を併設している例は世界中どこにもなく、両方を同時に申請した場合、日本人学校の必要性自体を疑われ、共倒れになる可能性が高いと思われれます。

二 今後の方向性

当年一月二四日に、補習校希望者を対象に再度説明会を開催し、補習校（準全日制）廃止の経緯と、現時点では日本政府の援助を受けられる形での補習校の併設は不可能であること、従って、今後は、学習塾のような形で、希望者の父兄が中心になって準備・運営をして戴く必要があることを説明させて頂きました。説明会の後、補習校希望者だけのアンケート調査を再度実施し、回答及びアンケート参加者の連絡先を全員にフィードバックしました。

今後は、同様の希望を持つ父兄で連絡を取りあい、準備を進めて戴く予定です。全日制日本人学校設立準備委員会や、補習校運営委員会が主導することは考えていませんが、学校運営のノウハウや、日本人会や商工部会への働きかけなどの点で、お手伝い出来ることがあれば応援して行きたいと考えています。

全日制日本入学校の校舎を学習塾に貸し出すことが出来るか否か、また現地採用教員が学習塾でも教えることが出来るか否か、については現時点では何とも言えません（文部科学省は、『補習校』の場合でも、『全日制日本人学校』とは厳密に区別するよう求めており、認可が下りるかどうかわからないため）。これらは、今後の検討課題として行きたいと思えます（尚、学習塾立ち上げ時、授業を行う場所につきましては、日本人会の事務所を複数のグループが同時に利用することが可能と聞いています）。

そこで、まずは学習塾のような形での補習校をボランティアベースで立ち上げ、進捗状況を見ながら、将来、「いわゆる補習校」（但し、教員派遣には一 名以上の生徒数が必要）として、外務省及び文部科学省に認知してもらうように働きかけを行っていくのが、最も現実的ではないかと考えるに至りました。

現在までの設立準備委員会の活動状況並びに補習校併設についての考え方は以上の通りです。

今後も従来同様、日本人学校運営理事会及び設立準備委員会の活動に対し、ご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

編集室解説

新設日本人学校の運営理事会が発足し、今後、この組織が日本人学校の設立準備をおこなっていくこととなります。ただ、設立された運営理事会には学校長や日本人会代表なども含まれ、実質的に誰が経営責任を担っていくのか、必ずしも明瞭ではありません。経営理事と運営理事を分けて、経営責任を明確にしていけないと、早晩、理事会構成員がすべて経営責任を負ってしまうか、経営無責任状態が発生することが危惧されます。

日本人学校と補習校を同時に申請することは不可能でしょう。また、補習

校への公的補助が獲得できる条件にないことは明白です。したがって、後は運用でやっていく以外にはありません。私的なものであれば、そのことを文部科学省に一々お伺い立てる必要もないことです。

準備委員会の計画では、現在の補習校教員数を、そのまま日本人学校に算入する学校運営が前提されています。

この場合、現地採用される各教員の授業持ちコマ数が、日本から派遣される教員の持ちコマ数よりかなり少なくなる可能性があります。準備委員会は現地採用される教員を勤務時間で拘束することで、問題ないとしています。が、教員の仕事は持ちコマ数を基準とすべきです。週の持ちコマ数で不足する分を、私的な「補習校」で補填する方法も、一つの選択肢として検討すべきだと考えます。

こうしたことを踏まえた、より緻密な経営・運営計画が策定されることを期待したいものです。

随想

ささやかな読書案内

野沢 佳織

海外で暮らしていると、むしろに日本語の本が読みたくなるのは私だけだろうか？ 今は、インターネッツ書店の Amazon 等で、クリックひとつで欲しい本が買える。航空便で注文すると送料が高つくが、船便にして気長に待つか、届け先を日本の家族か知人の家にして食品等と一緒に送ってもらうか、旅行者・出張者に持ってきてもらえば、送料が節約できる。というわけで、最近読んで面白かった本を何冊か、ご紹介したいと思う。

まずは、昨年直木賞を受賞した石田衣良@いら@の『4 TEBEN』。もんじゃない焼きの店と超高層マンションの

混在する東京の下町・月島を舞台に、四人のいまどきの中学生が、様々な出来事に遭遇しながら成長していく物語だ。いじめ、過食症に拒食症、父親の暴力、ホームレスの老人、難病のクラスメイトと、現代社会の影の部分がつぶり織り込まれているにもかかわらず、読後感はいびるの青空のようにさわやかで、春の夜風のようにせつない。現役の中学生はもちろん、かつて中学生だった人みんなに読んでほしい作品だ。石田衣良にはほかに、ドラマ化されて話題になった『池袋ウエストゲートパーク』のシリーズや、ミステリータッチの『うつくしい子ども』、崖っぷちの人間たちを描いた『LAST』などがあり、どれもおすすめです。もうひとり、注目したい男性作家に乙一@おついち@がいる。昨年刊行された『NOO』は、なんとも不思議な味わいを持つ短編集で、かつての星新一や阿刀田高に似た雰囲気

を持ちながら、もつと純粹で鋭くて、心の中のやわらかい部分をわしづかみにされるような衝撃がある。死を扱った物語も多く、ときに残酷な場面も展開するのだが、なぜか美しく哀しく感じられたりする。乙一にはほかに、若干十六歳のときに発表して賞を取った『夏と花火と私の死体』、連続殺人鬼の日記を拾った学生を主人公にした『コトヘ リストカツト事件』などがある。

しかし、ここ数年で最も読みごたえのあった小説は何かと問われれば、迷わず『本格小説』と答えるだろう。作者の水村美苗はいわば帰国子女の「はしり」で、一九七〇年代、十二歳のときに父親の仕事の関係でニューヨークに渡った。が、現地の学校になじめず、三島由紀夫をはじめとする日本文学を読みふけていたという。そんな作者の長編三作目にあたる「本格小説」は、三層構造になっ

学を教える作者の分身のような女性が語る部分と、その女性を訪ねてきた日本人の青年が軽井沢での不思議な体験を語る部分、そしてその青年が軽井沢で出会った、もと家政婦の女性が語る部分からなっている。三つの部分に共通して登場するのが、東@あずま@太郎という特異な人物で、アメリカで一介の運転手から身を起こし、医療機器メーカーを興して巨万の富を築いた彼の生涯と、『嵐が丘』を彷彿とさせる暗く激しい恋が物語の核をなす。一九七〇年代のニューヨークの日本人社会から、戦後間もない東京と軽井沢、そして現代の軽井沢へと舞台を移しつつ、作者は「本格小説」の世界へと読者を巧みに導いていく。

人の「ぼく」と、盲目の女性・京子の恋を描いた小説で、驚くほど美しい日本語で書かれている。美しい日本語といえば、歌人の穂村弘と東直子が詩と短歌のキャッチボールで恋をつづつた『回転ドアは、順番に』も魅力的だ。短い言葉に想いが凝縮されていて、想像力をかきたてられ、思わず短歌のひとつも詠んでみたくなってしまう。

さて、そろそろ気候もよくなり、ヨーロッパ各地に旅行される方も多いだろう。旅先で美術館を訪れると、きのためにおすすめしたいのが、『西洋絵画の主題物語』という本だ。『西洋絵画の主題物語』という本だ。聖書編と神話編の二冊があり、聖書編では、たとえば「受胎告知」というポピュラーな主題について、背景を簡単に説明し、フィレンツェのウフィツィ美術館やロンドンのナショナルギャラリーに展示されている同テーマの絵画を並べ、比較しつつ解説を加えている。キリスト教文化になじみの薄い日本人には、とても参考になる。また、江國滋の『名画と遊ぶ法』は、欧米の数多くの美術館を訪れた作者が自由に書きつづつたエッセイ集で、おなじみウィーン的美術史美術館のブリュエルの絵や、ヴェルヴェデーレのクリムトの絵にも触れていて、楽しく読める。そして、村上春樹の『遠い太鼓』は、一九八〇年代の後半に三年間、ヨーロッパで暮らした作者が、日々の生活を淡々とつづつたものだが、その悪戦苦闘ぶりは我々の経験とも重なるところがあり、断然親近感を抱いてしまう。ギリシアの島のおじさんとの会話や、オーストリアの山中で車がエンコしたときの苦労話など、もしかししたら小説よりも面白いかもしれない。

最後に、お子さんのいらっしやるご家庭に、「児童文学評論」というメルマガジンの購読をおすすめしたい。 <http://www.hico.jp> で児童文学

作家・ひこ田中さんのエッセイに入り、「メル・マガ」をクリックすると購読申し込みができる。毎月一回無料で配信され、最新刊の主な児童書・ヤングアダルト向け作品がくわしく紹介されている。海外にいなながら日本語の力をのばすには、楽しい読書が欠かせないと思う。ぜひ、一度お試しあれ。



ハンガリーでの美容室体験記

菅沼千鶴子

ハンガリーに住み始めて二回目の春を迎えようとしています。そんな気も緩んだころ、とうとう「スリ」に会いました！本当に巧妙です。パスの回数券を自動改札でチェックするときの一瞬の出来事、皆様もお気をつけて！さて、今回ドナウの投稿の依頼を受け、悩みました。やっぱりアロマテラピーのことを書くのか？不幸自慢のスリ？いや、もっと書きたいことがありました。ハンガリーで一番面白かったことそれは「美容室」です。私のハンガリーでの美容室体験記を投稿させていただきます。

今も昔も女性にとって「髪は命」ではないでしょうか？いくら綺麗に化粧をしてもその顔の額縁になる髪形が決まっていないと完成品としては失敗である。と、あるメイクアッ

プアーテイストも言っていました。日本でも自分の思い通りのイメージする髪型を美容師さんに伝えるのはとても難しい。それを海外でしかも外国語で伝えるのは困難を極めます。何かと無鉄砲な私ですから、ハンガリーに来て数ヶ月で二箇所ほど美容室に行ってみました。

一つ目のサロン。赴任して二ヶ月、日本でカットしてきたものの肩にかかるセミロング、一番面倒な長さだった私は、まだ少ない知り合いからの美容室情報を元に「ハンガリーで一番高級な美容室」の噂を耳にしました。ヴァーチー通り付近の某有名ホテル内に入った美容室、きつと英語も通じるだろう、世界的なチェーンサロンなだけにきつと失敗は無いだろう。という「噂」です。私の周りにはまだ、その美容室を利用したことがある人がいませんでした。「では私が偵察特攻隊として行ってみよう！」となったわけです。まず

は一つ目の難関「予約」です。私の英語が通じました。日時を決定し、カットの予約です。「指定のアーティストはいるのか？」と、聞かれ、「初めて」だと伝えると、「OK」だそう。予約当日美容室へ、高級サロン？いや、日本の町の美容室のような内装である。まあ、そんなことはよしとして、担当の美容師さん登場「・・・」不安が募る、なぜならば化粧品もそうだが、薦められた人がどれだけ綺麗か？「この化粧品はとてもいいですよ！」と薦める店員さんが美しい人であればあるほど効き目があるように思うのが人の心理ではないだろうか、美容師さんの髪型「かつこいい」と思うと、安心して任せられるものだ。以下コメントを控える。教えてもらったハンガリー語で「この本のような髪型にしてください」。まったく通じない・・・。「Ott vani」とヘアカタログを指差しやっと「OK」とのこと、肩を

なでおろした瞬間、勢いよく霧吹きで髪を濡らされ、次に出てきたものは、かみそり。あれ？シャンプーはしないの？と、聞きたいもののそんなハンガリー語は知らない。英語で・・・と考えているうちに一発目のかみそりが髪に入った！続けてどんなかみそりが入る。まったく容赦の無いかみそり捌き！ものの五分で終了。しかも表面をかみそりで削いだため、妙に広がり美容師さんも大苦戦しているよう、五分のカットに三〇分のブロー。そんな髪型、自分で手入れできるはずが無い。ヘアカタログの髪型とは全く違うことは言うまでも無い。鏡の向こうにいるのは「女カマヤツヒロシ」こうして私の初の美容室カット体験は終わった。料金だけはハンガリー！驚きの九〇〇Ftでした。

「よし、こうなったらパーマかけてみよう！」まさに無鉄砲。早速回りの友人にリサーチをかける。「パツチャニーテールにフランス帰りのカリスマ美容師がいる」とのこと。早速電話予約、これも英語が通じた。しかし、予約当日行ってみると、私の名前がない！あるのは「Susan」受付のお兄さん曰く「この時間はスーザンの予約、あなたの予約はない」と主張、私は「菅沼」である。どこでどうなったら「スーザン」になるのか教えてほしい。ハンガリー生活も慣れてきた私は怒ることも無く、翌日の空き時間の予約表に自分で「Suganma」と記載しとぼとぼ帰る。そんな時間もできたためハンガリー人の友人に「縦巻き」という単語だけ書いた紙と懲りずにヘアカタログを持参し、美容室に乗り込む。「こんなパーマをかけてほしい」と伝える。ろくにカタログなど見ずに「OK」とカリスマ美容師。不安が

募る……。取り出したのは日本のパーマのロットとは全く違うロット、どちらかというとホットカーラーのようなものだ。「これはやばい」と思った私は「もつと大きいもので」と伝える。露骨にいやな顔をするカリスマ美容師。それでも一番大きいというロットに変えてくれた。「縦巻きでお願います」というと、彼は「横で」と主張、今回はパーマ絶対失敗はできない。「縦！縦！」と半ば喧嘩腰に言い続ける。やっと彼も折れてくれ巻き始める。早い早い、日本のように毛先に薄紙など巻かないため、どんどん巻けるようだ。後から日本の美容師さんに聞いた話によると、その薄紙は毛先の折れを防ぎ、痛みをも防止するものであるそう。あつという間に下の方が巻き終わって。おもむろにパーマ液が！「ちょっと待ってくれ！耳上の髪の毛は？」カリスマ美容師「カタログと同じにするとここはかけない」と言

い張る、それはないだろう？確かに、カタログのモデルさんの髪型は耳下辺りからウェーブがかかっている、しかし、それは素人の私が見ても根本まで巻かないだけでしょう？半ギレ状態の私……。お願いだからここも巻いてよ！」ともう日本語で主張。ため息をつきながらカリスマ美容師は巻き始める。しかも、横巻き、「ここは絶対に横にしないとだめだ」と言い張る。下の巻いた髪にはすでにパーマ液が、そこは彼に任せて横巻きで、さて、日本ではここで「お釜」にはいるものの、入りません。ものの一〇分その後洗髪台に案内されそこで二液をかけてシャンプーして終了。ということ、ご想像つくと思われませんが、耳下の髪の毛だけ、強烈に強いパーマがかかりました。上は横巻きなので半乾きのときでまるでドリフの雷様状態。おもむろにブローを始めるカリスマ美容師、「なぜ……。パーマをかけたのに、ストレ

ートにブローする？」と疑問はあるものの、もう怒る気力も無く、出来上がった髪型はアフロのように広がった大きい頭。そこでカリスマ美容師「nagyon job」料金は七〇〇円。こうして、私のハンガリー美容室体験は終わりました。髪質がとても強かった私ですが、さすがにかみそりカットとパーマで見ても無残な枝毛と切れ毛の髪の毛に、パーマをかけてからというものの、自分でカットし過ぎ、今回日本に帰国、美容室にやつとの思いで念願の日本の美容室にいけました。五年の付き合いの美容師さんにこの話をしたところ、やはり金髪の人の髪の毛というものは実は何層にもキューティクルが重なっており実はとても強いらしいです。日本人の髪の毛にはかなり弱いパーマ液が適しており、熱を加えないとかからないほどの液だそうです。一〇ヶ月経ったそのときでも普通に日本でかけたとき様にパーマが残っ

ており、痛みも相当なもので今回はカットのみで我慢ということになりました。残り半年、このままがんばります。

ハンガリーで美容室に行くならば、日本人の髪の毛をより多く接している美容室を探すこと。かみそりは髪の毛の表面には入れず中に入れてもらうように話すこと。パーマをかける場合はできることなら日本からパーマ液を取り寄せてかけるほうが無難です。ストレートパーマというものはこの辺ではドイツのデュツセルドルフの日本人が経営している美容室しか聞いたことがありません。失敗するとそのまま日本帰国まで我慢するしか方法がない。強くかかってしまった場合、すぐにトリートメントをかけ、毎日トリートメントで伸ばしていく。前髪はパーマをかけない。というのが私と日本人美容師さんの考察です。最終手段は、縛れる長さをキープすること。

こうやって振り返ってみると、笑い話にしかならないものですが、髪型を失敗した女性ならわかるように、本当に毎日がブルーな日々を過ごすことになりました。ハンガリーで素敵な髪型をしている人に会ったら是非聞きましよう。「どこでカットしているの?」と。いい美容室を知っているかも知れません。逆に「日本の美容室です」といわれるとがっくりしますけどね。ウィーンの日本人が経営する美容室の支店がブダにできるという噂も耳にします。たかが髪型、されど髪型、自分の思い通りの髪型になったときの爽快感、気分も晴れやかに過ごせるものです。そんな、女性にとつてリフレッシュの美容室が早く見つかり、ハンガリーの生活も一段と楽しくなるのではないのでしょうか。

注:ここに書いたものはあくまでも私の体験であり、すべての方がこんな体験をしているわけではありません。



詩歌

二〇〇四年元旦…つれづれの俳句

ドナウ春夏秋冬

齊川 直未

蝦夷松に 北斗と夢と 露架かり
 岩山や 緑惜しむか 萌ゆる秋
 身の冬を 語り尽くかや 春の宵
 雨止みて 月夜に浮かぶ 樹氷かな
 粉雪と 連なる丘や 冴える月
 月冴えて 照り返すかや 雪の丘
 氷雨なす 芝生変じて 蓴菜か
 枯れ枝も 見る間に光る 氷雨かな
 厳寒や 枯れ木に華の ブダペスト
 からころと 夢紫陽花や 石畳
 ひまわりの 種採る姿 見え隠れ
 池釣りや 動かぬ浮子と つい眠気
 うたた寝や 昼顔からむ 縁のふち
 切り株に 春告げるかな 産毛生え
 陽だまりの 寝雪かき分け 萌ゆる藨

呼応の産毛 去年の切り株

夏肌と 赤交すかや エゲルにて

甘薫り もみじ溶けゆく トカイこそ

ロゼワイン 透かして見ゆる 天の川

シヨプロンや 溜息漏るる 新緑に

君が面影 今見ゆるかな

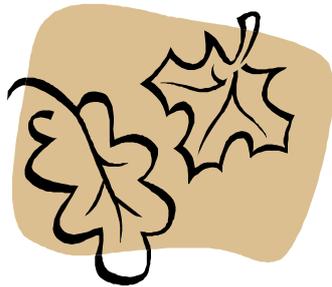
まるき丘 あくたの紛も 粉雪も

わけ隔てなく 月照り返し

詩「ドナウの星座」

齊川 直未

ドナウに架かるマルギット
 光る河
 手を携える川と野と山
 ブダの山々雪化粧
 負けじ威を張るペストの町並
 夕暮れはオレンジ色の陽の名残
 暗闇の欄干に
 もたれて視線を天の川
 星々が落ちて飾るか街明かり
 黒々の天空と尾根
 稜線は薄むらさきに染めぬかれ
 此方から彼方から宝石を散りばめて
 霧に浮かんだブダペスト



詩「昔も今もこれからも」

斉川 直未

万物は不動の動を貫き冬支度
止む事も無き瞬時
その連続こそが無限

印象詩「熱帯のオーロラ」

斉川 直未

春

寒風と豪雪に覆われていた景觀が
嘘の様に見える
そよ風が残雪の残り香を乗せ
太陽が気高く天中から
陽光の庭へと誘う
足元の枯れくたびれた芝草の
産毛のような新芽の震え

冬

時を語るに術もなく
産毛の新芽が芝草となり
雲が大地と憩う時
枯渴の緑を蘇生に導き
希望の明日を確かめる
新しき生命の躍動を約し
やがて又来る春への準備
そは、今が全力

夏

雲は風のなすがままに媚び
新緑は日の光と戯れ
影と希望を投げ
大地に抱かれる事を夢見る

秋

山は動ぜず水遙かなり
天あくまで高く
空こよなく愛しく澄み



たゆとう大河の
流れにも似た時の流れ
足掻きのつぶての波紋と音は
いつ始まって
いつ終わるとも知れない
作為の人間史か
お下がりシャツイで一番星を探し
宇宙の運行に心ときめかす
夕凧と風との戯れ
広がるロマンはそのまま
心の宝石となり
地球を遙かに眺める夢へと
溶け込んで行った
大地と雲と風の中
北半球と南半球の人類は
それぞれの天空に
動く事のない星

北斗星と南十字星を発見し
希望と夢を明日に託した
だがそれは同時に
人類の意固地とこだわりの

幕開けとなった

やがて武力の非行へと突っ走しり

打ちのめし

打ちのめされて泣き濡れて

武力の勝利の虚しさに

心は乾いたボロ雑巾

闇夜を見透かす

身の置き場さえも失った

観る星は違っても

思いの丈は同じと射す光

唇噛んで手を結び

人間賛歌を謳い上げ

大河の足掻きの波紋は消えかかり

新たなもがきの渦が生まれた

人は再び人を裁きはじめ

いがみ合いの明け暮れに

なお疲れ行き

虚栄で塗り固めた神を考案し

遙か彼方の昔から在ったと云って

神の使者となり

聖職の名の基で敵と味方を色分け

新たな奴隷を作った

この時から人は神の奴隷に

成り下が

歴史は再び軋んだ音を立て始め

過去の殺戮を口では嘆きつつ

内なる手に負えない黄砂の苛立ちと

嫉みの赤黒い炎の血を隠し持ち

今も又罵り合いを繰り返す

人は神の理想から

いかに懸け離れていたかを

知らされた果て

自らの炎と隠しきれない

不安におののき

隣人とやおら両手を握り合った

その手から伝わり合えた歓喜は

処女の鼓動の早鐘にも似て

はにかみと希望が入り混る

心を焦がし身を焼いた熱帯の

虚無と無力の泣き寝入りから

オーロラに眼を見張るが如く

体を起こし

太陽の勇氣に目覚める時を今

ついに迎えた

小説『熱帯のオーロラ』の詩

二〇〇四年三月九日



補習校より

創作「夢十夜」

最優秀賞

第四夜

こんな夢を見た・・・

狭い部屋、ピアノが一台。知らない男が一人。僕はその部屋のソファに座っていた。そんな僕を見て男が口を開いた。

「何座ってるんだ、早くこつちに来い」

びっくりした。あの男と僕は知り合いらしい。だが僕は彼のことは全く知らなかった。

「おい五郎！ どうしたんだボーっとして」

どうやら僕は五郎という名前らしい。不思議なものだ。自分の名前を知っているというだけで不安が解け、

彼が古くからの友人に思えるほどだ。

「お前から誘ったんだろう？ 作詞家がいなくてどうしろというんだ、追悼式まであと一日だろ！ とりあえず形はできたから、こつちに来い」

作詞家？ そうなると彼は作曲家なのか、そしてもう一つ、追悼式というのも気になる。僕はとりあえず重い腰を上げてピアノと睨み合う彼のそばへ行った。不思議だ、こうそばに居ると彼の名前すら思い出せそうだ。そう・・・ヨシアキ、そんな気がした。何も根拠はなかった。ただ、ただそう思ったんだ、どうにかして確かめられないだろうか、「わかった、聞かせてくれヨシアキ」何気なく名前を言ってみた。

「やっとやるきになったか」とヨシアキはピアノを弾き始めた。名前の訂正もしない。僕も彼の名前を知っていた。そしてヨシアキの奏でるピアノの音色、どこかで聞いたことのあるような優しい、どこか悲しく透

き通った音色。歌詞などつけなくても非の付け所のないような音色だ。聞き入っているうちに演奏が終わった。

「どうだ？ まだ未完成だがな」

僕は黙って笑顔でうなずいた。ヨシアキは微笑むとまた作業にかかった。もうこの時点で僕は彼を記憶のどこかで確認できるほどになっていた。そしてその瞬間僕の頭に一人の女性の姿が過ぎった、美しい女性の姿が。何気なくソファに近くの黒いテーブルに目をやると、そこに彼女の写真があった、驚いた事に僕とヨシアキの三人で写っている写真だ。僕はこの女性と何かかわりがあったに違いない。

「おい、いつまで見てる気だ。未練がましいヤツだな、あれからもう五年もたってるんだぞ」

何故か彼の言葉がひどく意味深な言葉に聞こえた。だがコレで僕と彼女が知り合い出会ったこと、彼女は

もうこの世を去った事、そして写真の三人の幸せそうな顔から察するに非常に仲が良かったことも分かった。早く思い出してあげたい。急にそんな気持ちになった。追悼式というのモキツと彼女のだろ。そのため僕と彼で曲を作っている。やつと分かってきた。

「だんだん胸の痞（つか）えが取れるにつれて少しずつ自分が「五郎」になつていくのを感じた。だがそれに少しの抵抗も無かった。まるで自分が本当に五郎だったかのように。ふと気がつくヨシアキが心配そうに僕を見つめていた。

「どうした？一言も喋らずに、キヨウカの追悼式だから真剣になるのは分かるが異常だぞ？」

「そう、キヨウカだ！最後の痞えが取れた。そのとき、僕は完全に五郎になつていたのかもしれない。何はともあれすべて思い出した。彼女の名前はキヨウカ、僕とヨシアキの専

属シンガーといった所か。五年前に自動車事故でこの世を去り、その追悼式がもうすぐだ。自分でも信じられない。第一僕はこの夢を見るまではヨシアキもキヨウカも全く知らなかったのだから。

「ああ、もう大丈夫。サンドイッチ一つ貰うよ」僕はテーブルの上に乗っている皿からサンドイッチを一つ口へと運んだ。そして作詞に取り掛かった。さすが僕は作詞家だけある。詩がどんどん浮かんできた。それに加え、キヨウカの記憶もよみがえってきた、というより湧いてきたといったほうが正しいのだろうか・・・

彼女は十五年前に歌手になりたいという夢を抱いて当時まだ音楽家として駆け出しだった僕たちのもとへたずねてきた。卒業式以外にまだ舞台にも大勢の人の前にも立つたことがないというのになぜか自信に溢れ、僕たちの下を尋ねてきた彼女の印象は凄かった。「経験は無いけど自信

はある」これが彼女の最初の言葉。ヨシアキが何故そんなに自信をもてるのか聞くと彼女は「自信も経験も無かったら何もできないから」と答えた。その一言が僕たちを虜にした。なぜこんなに鮮明に思い出せるのか、少し怖いくらいだ。

その時僕は彼女がこの世を去った前夜ことを思い出した。仕事が想像以上に遅くなつてしまい、タクシードを貸してくれとのことだった。そして彼女は一つ相談があると言つていた。軽く食事でもしながら聞いてくれと。忙しかったのか眠かったのか、僕は相談を聞かずに彼女と別れた。それがひどく気になった。自分が冷たくしたから死んだのか、それとも特別な悩みを抱えたのか、どちらにしろ深刻な事には間違いない。ためしにヨシアキに話してみた。それを聞くとヨシアキは呆（あき）れたように言い返した。

「あれは間違いなく事故だ。第一お

前にそんな深刻な悩みを打ち明ける
はずが無い」。少しカチンときたが凶
星だった。ヨシアキは話し続けた。あ
の夜、彼女は俺の家にも来たんだ」
正直シヨックだった、僕は彼女が僕
を頼りにしてきた物とばかり思っ
ていた。

「で、相談で・・・」僕が恐る恐る聞
いたら彼は力の抜けた声で答えた。
「飼い始めた猫の名前だ」。なんだそ
んなことだったのか、だが顔が何か
切なかつたし困った感じの顔だつた
のは鮮明に覚えている。だが、金を
貸してもらうんだ、困っているに決
まっている。コレがヨシアキの答え
だ。確かにそうかもしれない。僕は
反論できなかった。

思い出話も交え、曲作りは着々と
進んだ。途中で何度か口論になった。
ヨシアキは顔をしかめてキョウカは
僕が思っているほど純粹じゃないと
言い張った。僕もどうしてココまで
彼女を純粹だと思っていたのか分か

らない。もしかしたら、彼女に特別
な感情を抱いていたのかもしれない。
その感情が僕の記憶の中の彼女をよ
り美しく見せていた。もともと彼女
の記憶なんてものは無いのに。

口論は続き、時間はどんどん過ぎ
ていった。進まなかったのは曲だけ。
いくらたつても曲ができない苛立ち
からかヨシアキはいきなり楽譜をつ
かみクシヤクシヤにして床にたたき
つけた。

「なにをやっているんだ!」。僕は信
じられなかった。彼はただその場に
頭を抱えて座っていた。

「おまえこそどういうつもりだ、あ
れだけ大事な友達だと言っていたキ
ョウカの追悼式の曲を一晚で仕上げ
るなんて」

反論できなかった。そのとき、ド
アがもの凄い音を立ててひらいた。
そこに一人の女性が立っていた。間
違いない。キョウカだ。僕の想像の
女性と全く同じ顔、そして最後に会

った時にきていた黒いワンピースを
着てだ。彼女は何もなかったかのよ
うに口を開いた。

「何? まだできてないの?」。返事
をしたつもりだが言葉になっってい
ないのが自分でも分かった。それか
らの時間は楽しかった。まるで本
当に旧友に再会したかのようだった。

眩しい朝日と共に曲が完成した。
僕とヨシアキとキョウカの三人で
作った曲だ。ふとピアノの方を見た、
だれもいない。いやピアノ自体が無
くなっていた。僕は自分の部屋に立
っていた。僕の頭にはあの曲が流れ
ていた。



優秀賞

第七夜

こんな夢を見た。

私が立っているところは草原で、それは見渡す限りどこまでも続いていた。頭の上には、薄水色で、雲一つない空が広がっている。時々吹く風に草がゆれる音以外は、なんの音も聞こえない。ただ空と草原がどこまでもどこまでもひろがっている。その広すぎる場所の真ん中で、私はたった一人で立っていた。周りには、誰もいない。ただ自分一人だけが、その広い草原で、ぼつんと立っている。どうしてここには誰もいないんだろう・・・？奇妙なほど静まり返ったその場所に、自分がたった一人でいる、という事が、私は急に怖くなってきた。誰かいないの？だけれか・・・。私の叫び声も、虚しく空の向こうに吸い込まれていくだけだった。もちろん返事はない。と

うとう私は半分泣きかけて、草の上にひざを抱えて座り込み、顔を腕にうずめてしまった。

その時だった。私が人のけはいを感じて顔を上げると、そこには私と同じくらい年の女の子がいた。若草色のワンピースを着ているその子は、私の顔を不思議そうに、覗きこんでいる。

「どうしたの？どうかしたの？」

と、その女の子はいった。小鳥の鳴き声のような声だった。私は、人に会えたことにほっとして、そしてその子に自分がたった一人だったから、怖くて、寂しかったと言った。すると、彼女はますます不思議そうな顔になってまた尋ねてきた。

「ひとりって、どうしてそれが寂しいの？」

「どうして、って・・・。」

あんまりその子が不思議そうな顔をするので、私はどう答えていいかわからなくなってしまう。緑の草が

そよ風に揺られている。私が黙っていると、その子は草の上に、私と同じように座って、空を見上げながら言った。

「私はいつも一人でここにいるんだ。でも、全然不安じゃないし・・・寂しくもない。」

今度は私が質問する番だった。

「どうして？」

「みんないるから。」

みんな？ 驚いてあたりを見渡した私の目に写ったのは、やっぱり草原と空だけ。どこにも人なんて、いない。辺りをきよるきよる見回している私を見て、女の子はくすくす笑った。

「キミが気づかないだけ。」

風に髪を靡かせながら女の子は地平線の向こうまで続いている草原を見つめて、また言った。

「空も草原も、ここにあるものはみんな生きていて・・・喋ったりはしないけど、でも何となく笑っていた

り、泣いていたりしているように見える時があると思わない？耳をすませば、呼吸だつて聞こえてくると思わない？そう思ったらね、ここにあるもの全てが友達みたいに思えるよ。空も草原も、私たちの友達なんだよ。」

柔らかい風が、辺りを包み込む様に、草原を吹き抜けていった。そしてその時、私はその女の子が言っていたことが、全て分かったような気がした。彼女が寂しいと思わないわけ。「みんな」というのが誰のことだったのか・・・。

私はもう一度立ちあがった。どこまでも広がっている草原に吹く風が、気持ち良かった。



作文

人口問題とマザーテレサ

高等部三年 本 亜由美

世界の人口は、一秒に三人という速さで増加しているという計算がある。今この最初の文を書いている間にも、息を途絶えた者も数ある中で、約百人の新しい命がこの世界に誕生したのである。五十年後には現人口の六十億人の二倍に達してしまう勢いである。

世界的に人口は増加傾向にあるが、国別に見てみると、実はその傾向は同一ではない。発展途上国は増加という言葉よりも激増がふさわしい。インドの人口ピラミッドを見ると、その形は三角形をなしており、人口爆発の前兆を表している。先進国の日本では、逆に少子化、そして高齢

化の傾向にある。米国などでは、比較的一定の安定した正方形人口ピラミッドである。

それぞれの国が抱えている問題は異なるが、総じて世界人口問題とは、環境問題と深く関わりがあり、わたしたちの生活を脅かす存在であるのだ。まず、人口増加に伴って、現状でも不足している資源を更に消費することになる。もし資源が底をついたら、大袈裟かもしれないが、資源をめぐっての世界戦争が起りかねないのだ。中国での自家用車普及も資源不足への追い討ちをかけている。自動車の使用率増加は資源浪費だけにはおさまらず、二酸化炭素増加を促し、地球温暖化問題を深刻化させている。貧しい国々では、さらなる食糧危機も考えられる。

今回マザーテレサの本を読んで、インドの人々の現状を垣間見ることができた。インドの人口爆発は、スラム街に住んでいる人々を増やして

しまうだけのように思えてくる。このような問題を考えると、分かっているのになぜそれを阻止することが困難なのだろうかという疑問が生じる。

それは、主な人口爆発の諸国は貧しく、教育が十分行き渡らないため、出産時期も早く、一人の女性が一生に産む子供の数が多いためである。彼らは、貧しいゆえ、多くの子孫を残すことで家計を支え、老後も安心だと思っている。しかし、今や医療の充実により、ほとんどの子供が死なずに成人できるのだから、いくら発展途上国でもそんなに多く出産する必要はないのだ。また、アフリカ諸国では、伝統的な考えから避妊法を認めない男性も多く、HIV感染の問題も含め、教養不足は人口問題の大きな原因の一つとなっている。

マザーテレサは、インドの若い女性たちに、妊娠中絶はいくら育てられないからといってもするべきでは

ないと説いている。この考えはマザーの信仰からきているが、エコロジストが見れば、全く逆の考えを説くだろう。

私は、この問題を解決するにはどうしたらよいのかと考えたとき、やはり子供を産まなければ良い、そして無理に全ての人々を助けようとせず、自然界の法則に従って生活するしかないと思っただ。しかし、マザーの考えを知り、尊い命を見捨ててはやはりいけないと思い直した。今、私は二つの考えのジレンマに陥っている。そして私だけではなく、多くの人口問題を考えようとする人は、そのジレンマに悩まされているのではないだろうか。

人口問題は、ますます深刻になりつつある。唯一私たちにできることと言えば、この問題を無視したりせず、多くの人に伝えていくことだと思ふ。

日本語と英語

高等部三年 二村かおり

日本には、外国からの文化や情報が絶え間なく送られてくる。そして、そのほとんどが日本語訳されて私達の手元に届く。小説、雑誌や新聞の記事、映画やドラマ、ニュース番組でのインタビュー。改めて考えてみると、かなりの量の情報が訳を必要としている。原文で情報を直接理解できる人もいなくはないだろうが、ほとんどの日本人が翻訳、または通訳された情報を利用している。

日本人にとって、翻訳、通訳は必要不可欠な存在だ。しかし、外国語を正確に日本語訳するのは難しい。特に小説や映画などでは、独特な表現や登場人物の台詞が日本語では表せないこともあるだろうし、日本語にはない外国語特有の慣用句などもあるかもしれない。それに加えて、

作者の意図も伝わるようにしなければならぬ。そのすべてをこなすのは、とても難しいことだ。

以前、学校で読んだ英語の小説の理解を深めるために、その小説の日本語訳を読んだことがある。しかし、訳された本を読むとなんだか不自然さを感じた。二冊を比べると、原本の台詞や描写が日本語訳の方ではほとんど直訳されていた。英語では自然に感じた文も、日本語訳では大袈裟に感じたり、意味がよく判らなくなったりしていたのだ。英文をただ訳すだけでは日本語として不自然になっってしまう、英文の方が理解しやすいなんてことになりかねない。ある程度全体の意味をくみ取って訳した方が、意味が伝わりやすいのかもしれない。

しかし、意識も問題になることがある。もし訳者が原作の意図を誤解してしまえば、物語の雰囲気自体が変わってしまうのだ。ある映画では

に責任の重い仕事なのかもしれない。

字幕があまりにも実際の台詞と違っていたため、ファンが署名活動をおこなって制作者に働きかけた例もある。だが、登場人物の描写や物語の雰囲気は正確に訳するのが難しい。一人称にしても、英語では「ひとつなのに対して日本語では「私」「僕」「俺」「わし」など立場や人柄によって異なる。また、時代背景によっても言葉遣いがかかなり違うだろう。それに加えて細かいニュアンスまでも正確にくみ取るには、原文をかなり深く理解することが必要なのではないだろうか。日本語訳を手取る人にとつては訳されたものがその印象を作り上げてしまう。もし名作が訳者の受け取り方で誤解されてしまうとしたら、とても残念なことだ。その分「正確に訳す」ことは訳者にとつてもとても大きなプレッシャーになるのではないだろうか。

普段はあまり意識されない陰の仕事だが、翻訳者や通訳者は想像以上



卒業作文

私の六年間

高橋 真奈

四歳の頃アメリカに引っ越して、すぐに体操を始めました。ちょうどテレビのあるチャンネルを見たら、一人の女の人が、逆立ちをしながら足を曲げてうまくバランスを取って、足で背中を触って見せたのです。私は、その時から体操に夢中でした。母にさっそく体操をやりたいと言うと、インターネットで調べたり、アメリカでできた友達に一生懸命、聞いてくれました。

苦勞して見つけた場所に通い始めたときは、いろんな友達ができて、とても楽しかったです。最初は簡単な事から習い始めました。難しいレベルには、もつと年上の子達が入っていました。しかし、私は学校でも練習し、じよじよにうまくなっていました。通い始めてから二年がたち、チームにも入りました。もう、小さい子達のレベルではありません。色んな所でパフォーマンスをやったりもしました。いろんな子と友達になつて、とても楽しい時間でした。しかし私は、まさか引っ越すなんて、夢にも思っていませんでした。

二〇〇三年六月頃に、お父さんが、「引っ越すぞ。」と言いました。私は冗談だと思っていました。大真面目の顔で言うので、冗談でない事はすぐにわかりました。「場所は、ハンガリーというところだ。」とお父さんが言いました。私は目の前が真っ暗になりました。友達に言うと、目をそむけたくなるような顔をするので、とても辛かったです。お母さんが買ってくる本の中にハンガリーの事が書いてある本が、どんどんふえていきました。体操をやめるのはいやだったけど、友だちとはなれるのは、もつと嫌でした。万が一ハンガリーという場所で友達ができなかつたらどうしよう？と私はなやましました。

の子たちが、ハンガリーにもいれれば
いいなと願いました。

ハンガリーに来て、いろんな人と
出会い、私は気づいたことがあります。
す。友情は、原石ではなく、ちゃん
ときれいに磨かれた宝石だと言う事。
この地球に住んでいるみんなが必要
なもの。それが、友情だと思います。

僕の六年間

塘 健介

僕はこの六年間、何人もの人たちに
支えられてきました。友達の中で
も僕が一番感謝を言いたい人は、今
はもう転校した児島大君です。アメ
リカンスクール初日、僕には大君が
神様に見えました。英語が全くしゃ
べれなかつた僕に、色々アドバイス
してくれたり、学校の中を案内して
くれたり、先生の言った事を訳して
くれたりしました。もし、大君がい

なかつたら、たぶん僕は、アメリカ
ンを初日でやめたいと、思っていた
と思います。

他にも感謝の言葉を言いたい人は
沢山いますが友達より先生よりも僕
が一番感謝の言葉を言いたいのは僕
の父・母・兄に対してです。

父は、僕が一年生の頃から勉強を
手伝ってくれたり一緒に遊んでくれ
たりしました。時々厳しいときもあ
りますが、かっこいい父です。

母は、家族にとても優しく、とり
わけ、優しくしているのはペットの
ナツプです。母は家の中で一番厳し
いけど、一番優しくして、そして家族
思いです。ついでに言うと、家で一
番強いのも母です。

兄は、と言うと感謝の言葉より文
句の言葉のほうが多いかもしれませ
ん。兄はすぐ怒るし僕は毎日のおう
にいじめられました。勉強に関して
は、ほとんど手伝ってくれませんでした。
でもスポーツについては、お

礼が言えないほど助けてもらいまし
た。

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、
そしてほくを助け、励ましてくれて
くれた大勢の皆さん、ほんとうにあ
りがとうございました。そしてこれ
からも、よろしくおねがいします。

卒業

戸田 大貴

六年前、初めて小学校に入った時、
全ての物の大きさや大変さに圧倒さ
れました。ぼくは、そのころ走るの
が遅く運動会の徒競走ではいつもピ
リを争っている始末でした。スポー
ツはまるでだめ。しかし、そんなぼ
くの小学校生活の一番の思い出はソ
フトボールです。ソフトボールは、
九人ひとりひとりが大変であり、チ
ームがまとまり一丸となることが大
切なスポーツです。ぼくは、このソ

フットボールから、ちがう役割を持ちながらも一人一人が大切にされること、また仲間で力をあわせる素晴らしさを学びました。

今、卒業式に出ています。がぼくにはあまり実感がわきません。ただ、ぼくのだった道を立ち止まってかえり見ると、ここまでたどりつく間には、さまざまなことを学んできたと思います。友人達一人一人の大切さを知り、感謝という言葉の重さを知りました。入学式で、ぼくよりずっと背の高い六年生と手をつないだ頃を思い出すと体も心もずいぶん成長したと思うし、視野も広がった気がします。日本での行事はいつも楽しんでばかりでしたが、今振り返ると、たくさんの人々に支えられて行われていたのだ、ということも見えるようになってきました。勉強についても、一人では何も出来なかったと思います。

いつもたくさんの人々に支えられて、今の自分が成り立っているのです。だからぼくのもとになっている人々の存在を決して忘れることなく、感謝の気持ちを持ち続けていくつもりです。この式を境に小学校の壁を破って中学校という新たな大きな壁に向かっていきますが、精一杯はばたき、頑張っていきます。また、かけがえのない友人達、今までぼくを支えてくれた先生、そしていつも見守ってくれたぼくの家族に「ありがとう」という言葉を送ります。

私の学校生活

林 綾乃

六年生になり卒業は、てつきり前の学校でするものだと思っていました。しかし、父がハンガリーへ転勤するかもしれないと言いました。私には、とても仲良しの友達もいたし、

最初はいやだなあと思いました。前の学校に偶然ドイツから帰国した子がいて、「ハンガリー」と言っても、その子しか分かかっていませんでした。そのくらい、まわりの友達にはもちろん、私にとってもハンガリーは未知の国だったので。でも、ヨーロッパだし、きつときれいな国だろうと思ったので少しづつ行きたくなってきました。

実際ハンガリーに来てみると外は寒いし時差ぼけもなおっていないなかったので、しばらくは家の中で退屈していました。そんな時にも、母はがんばって夕飯の支度をしていたりして、えらいなあと私の目には映りました。父は日本にいた時と変わらず仕事を朝早くから始め、すごいなあと思います。

私自身は学校に通い始めて、少しずつ慣れてきました。言葉の壁があったりして、不安になることもありますが、そんな時に頼れるのは友達

です。日本では当たり前すぎで、これまで考えたこともありませんでしたが、友達の大切さ・素晴らしさというものをハンガリーへ来てよく考えます。これからも友達を大切にしていって、これからも仲良くしていきたいと思います。勉強も、もちろん頑張っていきたいと思えます。母の手伝いも言われなくてもやろうと思えます。

前の学校の友達にも手紙などを送って、どうなっているのかいろいろ聞いてみたいです。ハンガリーでの少しだけの小学校生活だったけど、とても楽しかったです。中学校ではもっと頑張ります。

水泳にかけた日々

林 健介

ぼくが水泳を始めたのは幼稚園の年中の頃です。つまり今まで七年半

水泳をやり続けてきたことになりました。

最初は、水泳と言っても、ほんの水遊びにすぎませんでした。水中であわをふいたりしていたのです。本格的に泳ぎ始めたのは、一年ほど経った年長の中ごろからでした。

小学校に入り、ぼくには体育の中でさほどほこれるものがありませんでした。が、そんなぼくに一つだけほこれるスポーツがありました。それは水泳が水泳です。ぼくは夏になりました。一年のころはまだ十mや十五mを泳ぐくらいでした。しかし、二、三年のころには二十五mや五十mなども泳ぐようになりました。

四、五年の時、ぼくはやる気をなくしたことがあります。背泳ぎのターンやビート板の練習でつかれるのがいやだったからです。このようなことがあって、ぼくは通っていたプールもさぼることが多くなりました。

たまに行って泳いでみると、さほど苦しいとは思わないのにもかかわらず、次も喜んで行こうとは思えませんでした。時間は静かにわきを通り過ぎて行きました。

ぼくが再び水泳をやる気になったのは五年の最後の頃、ハンガリーに行くことを知ってからです。このことを知ってしばらくしてから、ぼくは再び水泳に力を入れるようになりました。そしてこの時から日本を出るギリギリの二日前までよく泳ぎました。ぼくはスイミングスクールの級を上げたいがために一生懸命になったのです。四、五年の時、水泳をさぼったのをひどく後悔しました。

出発する二日前も、ぼくは学校のプールで泳ぎました。日本での小学校生活最後の水泳でした。この時ぼくは、友達と一緒に遊びました。そして、八月三日、ぼくは日本を出ました。

ハンガリーに来て初めて泳いだの

は、去年の十一月にアメリカンで水泳の授業が始まった時です。それまでアメリカンのPEでは球技ばかりやっついて、ぼくの得意なものが一つもありませんでした。そして水泳が始まった時、ぼくは思いました。“ようやく力を出す時が来た”と。

ぼくが本格的に競泳の練習をし始めたのは今年の一月になってからです。アクティビティーの初日では、練習がきつくばててしまいました。しかしその後はしだいに慣れ、簡単にはばてなくなりました。

さて、ここに来て一番の大きな出来事は、アメリカンでの水泳大会でした。二日あった試合の両方に出て、三つのメダルを取りました。これではぼくは、かなり自信が出ました。

このようなことができたのも、七年半水泳をやり続けたからだだと思います。ぼくは他のスポーツをあまりうまくやることができない中で、水泳だけは得意でした。水泳は、ぼく

のほこりです。そして今後も泳力をみがいていきたいと思っています。

私の六年間

細川 萌里

ぴかぴかのランドセルを背負って入学した私。いつも、時のたつのを忘れ友達と遊び、毎日を楽しく過ごしていました。でも、私が四年生の時、突然ハンガリーへの引越しが決まってしまうました。自分が外国で暮らすなんて、夢にも見ていないことでした。だから、良いことなのか悪いのか、その時の私には全く予想もできませんでした。

いざハンガリーへくる時は、半分の期待と、あと半分は新しい環境への興味で気持ちはいっぱいでした。まさか、大きな苦労が待っているとは考えてもいませんでした。大きな苦労 それは、言葉が違う

こと。ハンガリー語はおるか、英語も全く分からない私には、いつも友達の手助けが必要でした。日本では、友達といえばイコール遊び仲間であったのが、ここでは違いました。仲間の顔とそして、やさしい先生の顔を両方持つているのです。友達とは、一緒に遊ぶだけではなく助け合うものだ、ということに、ハンガリーへ来て気づくことができました。今では、転入生が来ると、私がお子を手助けしてあげられるくらいにまでなりました。

ハンガリーに来たことで、私の人生は大きく変わったと思います。ここに来てもう約二年になりますが、この二年間で得た経験は、私にとっても貴重なものです。これからも、この私の財産をさらに増やし、生かして、いろいろなことに挑戦し、頑張っていきたいです。また、この貴重な機会を与えてくれた両親に感謝の気持ちを送ります。

外国での英語

翠 直孝

ぼくはハンガリーに来ていろいろなことを学びました。外国人とのふれあい方、新しい国での生活、そして一番自分のためになったのが英語です。日本にいた時は英語なんて必要ないと思っていただけハンガリーに来て英語の重要さが分かりました。英語は世界の共通語なので話せないより話せるほうがいいに決まっています。話せて損になることは何もありません。ぼくは将来、きっと英語が自分のために役に立つと思います。来たばかりのぼくは別の世界に来たような感じでした。そんな中で助けてくれたのが友達でした。アメリカンスクールでは、英語の話せないぼくに通訳してくれたり、いつしよに遊ぼうとさそってくれました。

しかし、家に帰るとそこには、難問がまちかまえていました。アメリカ

カンスクールの宿題です。来たばかりのぼくは英語が全然分からなかった。宿題に書いてある問題を解くのにひと苦労でした。はつきり言って、ハンガリーに来てすぐのころは日本に早く帰りたいかったです。

アメリカンスクールでは五年のころから運動系の部活をはじめました。外国人の友達を増やすためです。それに英語も少しは上達すると思ったからです。それでも五年のころはほとんど外国人との会話はありませんでした。しかし六年になってから急に外国人との会話が増えました。なぜかはよく分からないけど、とにかく外国人と話しやすくなったのは確かです。

そんな中でぼくにとって補習校は天国でした。なぜなら日本語での勉強だからです。アメリカンでの勉強はほとんど理解できていなかったけど、補習校なら日本語だから理解できないうことは、ほとんどありません。

ません。

しかし補習校の勉強にも、だんだん集中できなくなってきました。アメリカンの宿題が増えてきたからです。ただ、昔のぼくとは違い、今なら英語が少しは上達したので、宿題で困ることがほとんどなくなりました。

ぼくは、さらに、アメリカンスクールはもちろん補習校での中学生としてもがんばっていきたいと思っています。

友達

山崎 勇祐

僕の六年間は、いろいろあったと思います。実はほとんど覚えていません。園児だった時、一、四年生の頃も、印象的なところを途切れ途切りに覚えていくくらいで、たった一年前であるはずの五年生のときの

ことさえあまり覚えていません。実際は何年という月日がたっているのに、まるで一瞬のように感じてしまいます。苦勞したことも、今では記憶の奥底にある程度です。まさに「どの元過ぎれば熱さ忘れる」です。

しかし、唯一覚えていることがあります。それは、先生と友達、つまり人物についてです。先生や友達との思い出はそう簡単に忘れる物ではありません。先生にほめられたこと、しかられたことや友達と一緒に遊んだこと、勉強と一緒に競ったこと、時にはけんかしたこと。友達がいることで、辛いときや学校の日々も楽しく過ごせるのです。友達のお陰で希望が見えるのです。

すぐに会えないような友達とは、会えると嬉しさ倍増ですが、また別れるときの悲しさも倍増してしまいます。別れる直前などは、何を話したらいいいのか、何となく言葉が出なくなつて、お互いが気まずくなつた

りします。その時が一番辛いですが、その時声をかけられれば、又会えることができるのです。

今までで、一番友達が重要だと思つたのは、僕がハンガリーにくる直前のことです。あの時、最後の学校で明るく振舞つてはいたものの、心の中で僕は悲しんでいました。しかし、学校が終わるとき、皆が励ましてくれたのです。僕はそのお陰で立ち直れ、同時に、ハンガリーにもきつと友達がいる、と希望も持てました。

そしてハンガリーに来てからは、英語が話せなかつたので、いつも友達に助けてもらっていました。だから僕の学校生活の中で友達は、ここハンガリーでも一番大事な存在だったのです。これからも友達を大切にしていきたいです。補習校での一年半、先生方にもいろいろお世話になり、ありがとうございます。中学に入つても宜しく願います。



評論

第一三〇回芥川賞を読む

盛田 常夫

小説は今の私の守備範囲に入っていない。高校時代にはドストエフスキーなどのロシア文学やゲーテなどドイツ文学を片っ端から読み、日本の私小説批判を展開した中村光夫の持論に共鳴を受けたりして評論文などを書いていたが、大学に入学した途端に社会理論や哲学に興味を持ちだし、以後、小説とは縁のない生活になってしまった。

二〇歳の若い少女が第一三〇回芥川賞を受賞したというので、一時帰国した時にでも買って読んでみようかと考えていた。そんな折、日本からのお客さんが「お土産に」と、金原ひとみの『蛇にピアス』と綿矢リサの『インストール』を持参された。

短編だから、どれも二時間足らずで読み終えた。読み終えた後、「うーん」と唸るしかなかった。これが芥川賞かというのが率直な感想。とくに、『インストール』は文章も構成も、幼さが残っていて気になった。もつとも、受賞作はこれでなく『蹴りたのい背中』だということが分かったのは、読み終えてから。ただ、この『インストール』は高校生の読書感想文で取り上げられる人気一番の小説だと知った。文章も易しいし、扱っているテーマも人間関係も単純だから、今の高校生もゲームや携帯を扱うように読めるだろう。今の若い人が文学に関心をもつきっかけになるかもしれないと考えたりもした。だから、もしかして、これは選考委員の文学者や文芸春秋社の陰謀ではないのかと疑っている。この程度で芥川賞がもらえるなら、「僕だって、私だって」と考える高校生諸君が出てきてもおかしくない。そういうことにな

れば、文学界と出版社の思いつぽか。案の定、受賞作を掲載した月刊『文藝春秋』が百万部を超え、史上最高の売上だというし、単行本はミリオンセラーに届きそうだ。ビジネスとしては万々歳。もつとも、『文藝春秋』を買うのは中年サラリーマンだ。娘の日常生活を覗き見したい父親が買っていくようだ。

『蛇にピアス』

二つの小説とも、不登校や引きこもりの少女の生活を描いたもの。ひきこもり自体は一つの社会現象ではあるが、同年代の青年たちの日常生活とは離れた、非日常的な生活である。『蛇にピアス』という奇妙な題名の短編は、何のために生きているのか、その実感も意味も見いだせない。「私」と、その男友達「アマ」、それからピアスと刺青を仕事にしている男「シバさん」の三人だけの話。三人とも、遊民的なパンク生活を送っ

ていて、「私」はマゾ的だが、二人の男はサドでホモでもある。気怠い毎日の中に、ピアスと刺青とサド・マゾが刺激を与える。

舌にピアスを付け、そのサイズを次第に大きくすると、やがて舌が蛇のように割れるようになる。痛みを耐えて舌にピアスを付ける、背中に刺青を彫る。そこにいたる生活が描かれる。何故、激しい痛みを耐えてピアスをするのか。奇妙で目的のない日常生活の中で、生きる証は肉体的な苦痛でしか感じる事ができない。抱かれたまま、首を絞められてもいような感覚。夢遊病者のような生活感覚。こんな生活の中で、突然、男友達との連絡が付かなくなる。死体で発見された男友達アマの遺体には、ホモセックスの痕跡が。そして偶然に、その痕跡の証拠を、「シバさん」の店の中で見つける。

余りに激しい内容に、中年のお父さんは付いていけず、これでは「お

前も読んでみる」と子供に雑誌を渡せないそうだ。だから、単行本では『蹴りたい背中』の半分しか売れていない。学校の先生も、推薦図書とするにはためらうのだろう。とにかく、現代遊民（フリーター）の生活の一部を描いた作品だ。こんな非日常的な生活描写がどうして小説になるのか。もつとも、変哲のない生活は物語にはならない。昔から文人は自らの非日常的な生活や行動を小説にしたのではないか。この短編も、同じように私小説なのだ。

肉体を傷つけることでしか生きていく実感を得られないというのは、物質的な豊かさが生んだ現代遊民の悲劇でもあり喜劇でもある。生きる意味を問うのは青春時代の特権だが、現代の遊民には果てしない無気力さが漂っている。我々の学生時代はデモと暴力の時代だった。これも裏から見ると、暴力を通じた物理的な力でしか、生きる意味を見いだせない

ことの表現だったともいえる。大学に入って間もなく、横須賀で機動隊とぶつかって怪我をした同級生と話す機会があった。端正な顔立ちのこの優男は、後に駿台予備校の名物教師になった人物だが、彼の語った言葉が忘れられない。「機動隊から暴力を受けて、どこまで耐えられるのか。こういう時に、生きているという感覚が得られる」と。ベトナム戦争とかアメリカ帝国主義とかというのではない。物理的な痛みを感じて生きる証を確かめたい。そういう実存的な欲求だった。トレンチコートを着こなし、サルトルを小脇に抱えて歩く姿は、様になっていた。

一九六〇年代末の全共闘運動は、「第二次安保闘争」とも言われるが、それは部外者が勝手に後付けたまったくの誤解。参加している連中は、ベトナムも安保も関係なかった。暴力を使って暴れたり、逆に機動隊から暴力を受けたりすることで、生き

る刺激と意味を見つけないと考えている者がほとんどだった。この感覚を理解できないことはなかったが、自分には異質だった。それはピアスで肉体を傷つけたいという欲求に違和感を覚えるのと同じである。

少なくとも、一九六〇年代までは言い表せないような若者の怒りが外に向いていたとすれば、それ以後の若者の焦燥感の内向きになっている。

家庭内暴力、陰湿ないじめ、おたく、多数のフリータ遊民がそれだ。我々の時代は日本が貧しさから解放される最中の時代の、団塊の世代が迷い込んだ日々だったが、今は生活の厳しさから免れて無気力化した若者が、ヴァーチャルな生活に逃げ込もうとしている時代だ。その生活の一つの描写が『蛇にピアス』だろうか。

『インストール』

不登校になった私が、「エロ会話」のネットチャットのアルバイトをす

る小学生と知り合い、彼が学校に行っている間に、チャットの代理をする話だ。設定は今風だが、文章も構成もいまいち。『蛇にピアス』には無理な設定を感じないが、この短編は舞台が展開する毎に設定に不自然さがあり、嘘っぽい感じを拭いきれない。文章表現も携帯メールを読んでいる感覚に襲われる。とても表現力があるとは思われない。

今の高校生の多くは本格小説を読む力も忍耐力もないだろうが、ネットチャットが主要な部分を占めているから、メール交換する感じでの小説を読めるのだろう。いわば「丸文字」世代の文学と考えればよいが。

もう一点。『インストール』のストーリーは、どこかで慣れ親しんだ情景を想起させる。何だったかなとよく考えてみると、そう、ZEMの番組「中学生日記」だ。最近の「中学生日記」は以前と違い、作り話的な部分が多い。『インストール』はま

さにこの最新版「中学生日記」そのものなのだ。これなら、中学生日記の脚本をうまく小説化すれば、芥川賞だということになる。「映画化」が企画されているというのも理解できるが、やっぱりこの程度の脚本なら、「自分にも書ける」と考える高校生も多いだろうと思う。

『蹴りたい背中』

前作が「中学生日記」だとすれば、この受賞作は「高校生日記」。同級生から仲間はずれになっている私の心理描写と、「おたく」の男子生徒との奇妙な交友関係が、ほとんどストーリー性のない会話で繋がれていく。こういう小説は非常に読みづらい。無為の、気怠い、遊民的青年の高校生活をうまく描いていると言う評者は多いが、私にはただの心理描写が延々と連なっているだけで、ちっとも面白くなかった。多分、多くのお父さんたちは、ストーリー性のない

文章を最後まで読みきれないだろう。やっぱり、前作と同様に、非常に狭いテーマで、「高校生日記」を描いたと見るのが一番当たっているような気がする。舞台が高校生になっただけで、基本的なテーマや筋書きは「中学生日記」そのものである。それを悪いと言っているのではない。「中学生日記」の脚本は優れた作品だ。それが芥川賞を獲得したということか。審査委員会の評者が指摘するように、前作の『インストール』に比べて叙述が緻密で、丁寧になっている。多分、評者たちは前作からの「進歩」という相対的な評価を優先させ、「作家」としての資質を感じ取ったということなのだろう。

『蛇にピアス』より、『蹴りたい背中』を推した評者が多かったのは、前作『インストール』の存在が大きいのと思う。しかし、『蛇にピアス』を含め、彼女たちが描いた小説は、そのストーリー性やテーマ、叙述の完成度から見て、芥川賞を受けるほどの深さをもっているだろうか。私には「高校生日記」の脚本という印象から抜けきれない。審査委員会の評者の一人は、「蹴られるのは私たちの背中のようだ」と媚びを売るような評を寄せていたが、主人公の「私」が男子生徒「にな川」の背中を蹴りたいと思う以上に、古い団塊世代の私は、この無気力な主人公たちを蹴りたい」と思う気持ちが強い。

「狭さ」と私小説

文学を生業としている諸氏の多くは、欠方ぶりの若手の書き手の登場に拍手喝采しているようだ。これらの諸氏は、テーマの狭さやストーリー性の欠如を批判する人を、あたかも今の若者の世界を理解できない「おじん」か、道徳学者だと言わんばかりの勢いである。

この二人の小説はいわば「自分の語り」を音楽にしたニューミュージックのようなものだ。だから、目くじら立てて、テーマの狭さを批判しても始まらない。ただ、ニューミュージックとしても、本当に評価できるものだろうか。

クラシックのような小説を書こうとすれば、豊富な人生経験や積み上げた勉強も必要だろうし、資料の収集もたいへんだろう。若い人は経験も勉強も足りないから、どうしても身の回りの私事を描くだけになる。しかし、いつまでも「中学生日記」の世界にとどまっただけの本格的な小説家にはなれないし、自己体験だけを文章にしていたのではいずれ書くものがなくなってしまうだろう。

彼女たちの続作を読んでみたいという気持ちは湧かない。ただ、一〇年経って、彼女たちが書き下ろす小説を読んでみたい。ただの大衆小説家になっているのか、小説から足を洗っているのか、それとも小説家として成長を遂げているのか。

日本・ハンガリー サッカー親善試合の見所

ほんの十年ほど前までは、ハンガリーのクラブチームが日本に遠征し、日本代表を翻弄できるほどの力の差があった。Jリーグ発足以来、日本サッカーの実力が上がり、代表チームの世界ランキングは完全に逆転してしまった。現在、ハンガリーは七位前後を低迷している。ハンガリー戦の後に闘うチェコは常に世界のトップテンに居る欧州の強豪だ。

マツチメーク

今回の欧州遠征は、中堅チームと強豪チームというマツチメーク。ハンガリー戦でウォームアップしてからチェコ戦という構想だ。それにしても、「ハンガリーのような弱いチームとどうして」という疑問が湧くだろうが、W杯アジア最終予選のオマーンやシンガポールより手強い相

手である。ヨーロッパの中堅チームとどんな闘い方ができるのか、強豪チームとどれほど互角に闘えるのか、世界のトップとの距離も分かる。

ハンガリーも、日本戦の後にブラジル戦（二八日、ブダペスト）があるから、双方にとってこのゲームはトレーニングマッチになる。残念ながら、ハンガリーではブラジル戦が注目されており、日本戦の情報はほとんど流れていない。

ジーコ・ジャパンの課題

四月のハンガリー、チェコ遠征の後、五月末からアイスランド戦とイギリス戦が組まれている。この欧州遠征の後に、W杯アジア予選のインド戦を迎える。オマーンやシンガポールとの苦戦で明瞭なように、欧州から参加する選手のコンディションもコンピネーションも悪く、これが苦戦の大きな原因になっている。欧州で活躍する選手が良いコンディシ

ョンで参加できる欧州遠征は、ジーコ監督が望んだもの。欧州組が良い状態で、国内組とのコンピネーションを改善するのが、二度にわたる欧州遠征のテーマ。

ハンガリー・チームの状態

今年に入って、ドイツのマテウスが代表監督を引き受けることになった。ハンガリーで外人監督を迎えるのは初めて。ベンフィカのフェヒールが急死した穴は大きいですが、若手が成長しており、チーム力は上昇中である。選手としては、シュトウトガルトのFWを務めるサビツチに注目したい。ランキングが低いとはいえ、簡単には勝たせてくれないだろう。

フォーメーション

トルシエ監督時代は守備を重視し、DFを3人で固める3バック・システムをとり、バックラインを上げ下げする戦術を徹底していた。現在の

Jリーグもほとんどがこの3バックで闘っている。これにたいして、ジーコ監督は4バック・システムを取り、両サイドを攻撃に参加させ、攻撃に厚みをもたせている。

DFは国内組で、MFは欧州組というのがジーコの考え方。もともと、DFで海外に出ている選手はいないが。左ボランチ(守備的MF)に小野、右ボランチに稲本、左の攻撃的MFに中村、右に中田という配置。ただし、中田は状況に応じて、トッポ下に入ったり、ボランチ気味に下がったりしてゲームを組み立て直すキーマンとして役割を担っている。中村と稲本はリーグ戦での出場が少ないので、九分をフルに闘う実戦感覚と体力に欠けている。その代役として、国内組の遠藤、小笠原、奥、藤田が控える。

全員が集まらない

ハンガリー戦では中田はリーグ

戦を優先して、参加できない(対シエナ戦)。この場合、藤田が中田の位置に入るか、小笠原か中村がトッポ下に入るシステムになる。

問題はFWである。柳沢はほとんどリーグ戦に出ていない。高原も最近は後半からの途中出場が多い。それでもジーコは鈴木を含め、欧州のFWを使い続けているが、国内組の久保や大久保を入れて、FWに活を入れたいところ。また、シンガポール戦で代表デビューした活きのいい玉田をもっと早い時間帯から使うのか。決定力に欠くFWを入れ替え、もっと組み合わせを多様化する必要はないのだろうか。この山本監督のように、選手の調子や対戦相手に応じて、持ち駒をうまく切り替えていく手腕を見せてもらいたい。

ただ、今回の遠征はこのギリシア遠征、アジアチャンピオンズリーグの日程が重なり、横浜と磐田の選手が遠征に参加できないか、参加で

きても今度は逆に国内組のコンディションが良くない。アテネまで、大久保をこの代表に専念させると、今回のハンガリー戦で使える選手は限られてくる。チェコ戦の方が、中田を含め、メンバーの集まり具合と状態は良いだろう。今回の遠征メンバーは、一五日に発表される。

オマーンやシンガポールと違って、欧州のチームは最初から守備を固めて自陣に閉じこもることはないから、アジア最終予選とは異なった展開になるだろう。アジア予選が幕内と十両、あるいは三段目との闘いだったとすれば、欧州遠征は幕内力士同士との闘い。欧州で闘うことで、世界との距離が分かる。日本はアジア予選より、はるかに守備ラインを固めて闘う必要がある。この場合は攻撃のパターンが限定されるから、まさに欧州組のMF陣のコンビネーションと戦術が試されるゲームになるはずである。

会社紹介

Sunarrow Hungary Kft.

当社は、携帯電話用キーマットのメーカーとしてコマロム工業団地内に工場を建設し、本年七月から工場の操業を開始しました。（サンアロー株式会社 百%出資）現在の総従業員数は九五名（日本人五名、ハンガリー人九名）です。コマロム工業団地は、ご存知の通り、NOKIA社を中心に各サプライヤーが工場を操業しております。

さて、サンアロー株式会社は一九五九年に工業用ゴム製品の加工メーカーとして発足しました。以来、時計用防水パッキンの製造を手掛け、一九七一年には世界最初の導電性シリコンゴムの加工技術の開発に着手しました。これは、時代の変遷とともに電

卓、リモコン、電子楽器、コードレス電話など、幅広い業界で用いられています。現在では一九九〇年代後半から始まった携帯電話、携帯端末の爆発的な普及により、当社が今日まで培ってきたハイブリッド技術を駆使し、キーシートサプライヤーとしてNOKIA社を始め大手携帯電話メーカーへキーシートを供給しております。現在の当社のキーシートにおける業界シェアは約二五%と自負しております。

また、ハンガリー工場はグループ内でも新たな飛躍の契機と位置づけられ、以下のサンアロー経営基本方針の基で成熟した西欧の携帯端末市場のみならず、今後も経済成長が見込まれている東欧やアフリカ諸国の携帯端末市場の需要にも一層早く対応できるように、柔軟かつ充実した生産体制と品質システムの構築が期待されております。その一環として本年一月より二期工事を開始しました（二〇〇四年四月末完成予定）。

企業経営方針

・従業員が一丸となって、世界の顧客や地域社会に信頼される企業造りに邁進する。

・グローバルトップの品質、コスト、納期の達成をめざして、生産技術や業務システムの絶えざる改善に努める。

・仕事を通して一人一人が能力の向上を図り、活力ある企業風土を造り上げる。



創刊一五周年記念号 原稿募集要項

次号の『ドナウ通信』（第五号）は、創刊一五周年記念号になります。この記念号に掲載を希望される方は、以下の要領で、原稿を編集部まで送ってください。

（１）原稿は、ハンガリーでの生活、仕事、余暇など、当地での体験をもとにした随想を予定しています。

これ以外のテーマで寄稿されたい方は、編集部までご相談ください。

（２）編集作業を簡便化するために、寄稿原稿は、MS-Word 文書か、一太郎文書として編集したファイルを編集部まで送付してください。ただし、写真や表、図がある場合には、これを文書の中に入れて、別ファイルとして送付してください。

（３）原稿は縦書き、フォントの大きさは、MS 明朝 10.5 とします。形式を統一するため、題名や小見出しなども、同じフォントサイズでお願いします。編集部で统一的にフォントやスタイルを編集します。縦書きのため、数字は漢数字にしてください。

（４）長さはとくに指定しませんが、頁に収まるように編集しますので、原稿によっては短縮をお願いするともあります。

（５）締め切りは、六月一五日。以下のメールアドレスに、添付ファイルで送付願います。

morita@tateyama.hu
mobile: 06-30-311-5361
FAX : 361-4469

マラソンリレー参加者募集

今年度最初のロードレース、MATAV Vivicta が四月四日に開催され、絶好のコンディションの中、女子三名、男子五名の在留邦人が参加しました。総勢八千人を超える参加者がありました。

女子六・五キロ

浅野 未希 三 分五八秒

栗田 順子 三 七分四 秒

藤本 知弥 三 九分三五秒

男子六・五キロ

茂木 昌 三 分三 秒

岡 賢昭 三 一分五二秒

盛田 恒平 三 二分 五秒

村上 義 三 三分五四秒

男子一二キロ

盛田 常夫 五 分一七秒

六月六日にマラソンリレー大会があり、ハンガリー人と混合友好チームを構成して、参加予定です。参加希望者はご連絡ください。